



発行 KOA 森林塾 (事務局) 0265-70-7065 編集 早川清志 題字 島崎洋路

# 『たくさんさんの光を』

## 通年コース第六回報告『下草刈り』

春に植えた小さなかわい  
いヒノキは、背丈もあまり  
なく、地際からほんの数十  
センチのところから枝を伸  
ばそうとしている。けれど  
も、どうしても周りの草本  
類の成長がはやくて、充分  
な光を受けられなくなっ  
てしまっていたり、もしくし  
たらすっきり覆い隠されて

しまっているかもしれない。  
湿気を含んだ風とたくさん  
の光が枝葉全体にあたるよ  
うに、さあ下草刈りです。  
草本はもちろん木本も、  
できるだけ大きくなりたい。  
草よりも成長の遅い樹を林  
へと育てていくためには、  
一年で最も湿度が高く、蒸  
し暑いこの時季に、この作

業が必要となってきました。  
大汗をかきながらの単純作  
業はつらいものですが、刈り  
払った後を眺めてみると、植  
えた時のようにミニチュアの  
クリスマスツリーを散りばめ  
たような、檜の子が、作業の  
充実感を与えてくれるもので  
す。

植えてからの数年間、少な  
くとも年一回、(林地によっ  
ては年に二・三回)、適期を逃  
さず丁寧に、下草刈りをして  
いきたいものです。

8時30分 島崎先生の山小  
屋に集合。  
先生方のあいさつと日  
程説明の後、さっそく  
8時45分 分乗して西春近  
にある下殿島区々有林に  
向かう。



包み込むように



刈払機も、刃が命



刈って、払って、きれいになっていく



この樹は、何だったっけ

9時25分 現場到着後、下  
草刈りの目的・時期・回数  
や造林鎌と刈払機の使用  
方法を保科先生から講義  
して頂く。作業時の安全  
確保を第一に、体勢や作  
業要領を考慮しましょう。

10時 「しま」に散開して、  
下草刈り開始。今回は、手  
鎌と造林鎌のほかに、希  
望者は刈払機を使うこと  
に。イントラの川島さん  
と後藤さんがマンツーマ  
ンで、懇切丁寧に指導し  
てくれる。

12時 現場にて昼食。  
1時 付近の樹木散策。山  
火事跡地が放置されて、  
灌木林になったのを、数  
年かけて植林地にする予  
定のこの地。まだ残って  
いる灌木林を覗いてみま  
しょう。

2時 散策を終えて、小屋  
へ戻り、鎌のメンテナ  
ンス。  
3時30分 とりあえず終  
了。保科先生の講評を頂  
いて解散ですが、このさ  
いなので、鉈も研いでお  
きたい方は、遠慮なく、研  
いで行ってください。

参加者/角田さん、梶永さ  
ん、金田さん、小名川さ  
ん、佐々木さん、笹原さ  
ん、神保さん、杉村さん、  
田中さん、平さん、堀さ  
ん、湯澤さん、園田さん  
講師/保科先生、島崎先生  
スタッフ/川島、小泉、後藤、  
早川、坂野

# 『たくさんさんの伐倒を』

## 専門コース第二回開催報告

小暑が過ぎて大暑が近いとはいえ、盛夏を先取りしたかのように、降り注ぐ蝉の声と揺らぐ陽光。暗く涼しげに見える林分の中でも、湿気が停滞し、そよとした風も吹かない。

わずかに十メートル四方の範囲に、大小二十数本の樹が林立している現況を、十年後に相対幹距比が二十となるように。たくさんさんの伐る樹に生立してきた年月を想い、将来の森を託す保残木に心を配りながら、今の作業だけでなく次の作業を

考えつつ、伐倒の技術と感覚を向上させていきたい。相対幹距比の考え方、いろいろな伐倒のパターン、集材への意識：体力的にはもちろん、精神的にも非常な緊張を強いることになるけれども…

三日間。自分の中の引出しから呼び出してやってきたことは、上書き保存をして、新たに習ったことや感じたことは、それぞれ名前を付けて保存して下さい。少しずつかもしれないけれども、森への想いが詰まった箱が、大きく深くなるように。



パーより大きな樹も



どんどん引っ張ってください~!!

**3時30分** 現場での作業終了、小屋に戻ってチェインソーメンテナンス。  
**4時30分** 先生方の講評、解散。

### 二日目

**8時30分** 鳥崎先生の山小屋に集合。鳥崎先生のあいさつの後現場に向かう。  
**9時** 各班毎に伐倒開

専門コース第二回開催  
7月2日(金)  
3日(日)

一日目  
**8時30分** 鳥崎先生の山小屋に集合。先生方のあいさつ、日程説明。  
**9時30分** 前回と同じ、まずみヶ丘平地林の一角。二班に分かれて、各々10m四方の作業範囲を設定する。目視で、立木本数を数え、上層樹高を予測する。10年後の樹高を考慮して、相対幹距比を20に設定すると：保残木数は…。残す木を選んで、集材方向を決めたら伐倒開始受け口と追い口のマーク

キングをせずに伐倒してみよう。  
**12時** 現場で昼食  
**1時** 午後の作業開始。追い口は上(背)刃伐りで伐倒してみよう。立ち位置と退避方向をよく検討して。



わたくしにおまかせくださりませ

**12時** 現場で昼食。鳥崎先生が結婚式のため早退。保科先生が地区の用事を済ませて合流。  
**1時** 作業再開。チルホールを使った牽引伐倒を二班合同で。合図を初めに取り決めましょう。  
**3時30分** 作業終了、小屋に戻ってチェインソーメンテナンス。  
**4時30分** 保科先生の講評、解散。

### 三日目

**8時30分** 鳥崎先生の山小屋に集合。先生方のあいさつの後現場に向かう。  
**9時** 各班毎に牽引伐倒開始。まずは、牽引の必要がない木を伐倒してしまっ



仕事の終わりは、メンテにて

**12時** 現場で昼食。日差しがいつぱい降り注ぐようになってきて、木陰が減ったような…。  
**1時** 二班合同で牽引伐倒再開。午後の作業時間が少ないので、枝払いと造材は、スタッフがお手伝い。

**2時30分** 作業終了。小屋へ戻り、念入りにチェインソーメンテナンス。  
**3時30分** 鳥崎先生のキャブレター調整方法実演。少し機嫌の悪かったチェインソーも、あつという間に上機嫌。  
**4時15分** 先生方の講評、次回の連絡の後、解散。

参加者/斉藤さん、滝口さん、長坂さん、松岡さん、松永さん  
講師/保科先生、鳥崎先生、スタッフ/石原、小泉、早川、坂野

次回以降の予定

第7・8回 間伐  
7月17・18日(土・日)  
いよいよ間伐の回です。初日17日の夕方には暑気払いをしましょう。パーベキューで一杯。山の話で二杯三杯でも飲みすぎは…。

集中コース 夏の部

7月30日

8月1日(金)日

二泊三日の「ぎゅっと」コースです。測樹、間伐、伐出をやってみます。初日が両先生の担当です。

# リレー通信



## なぜ里山ボランティアにはまったのか！？ 小名川征生

筑波研究学園都市のなかに筑波農林研究団地がある。旧農林省の各種の研究所群がひとつところに集まって広大な敷地を占めている。どんな研究をしているのか、皆目見当がつかない。農林研究団地の東端には森林研究所があった。里山関係の書物の著



者には同研究所の先生方の名前が多く出ていることを今ごろ気づいたところである。  
わが家は昔JR常磐線の牛久駅から徒歩十分くらいのところにあって、普段は東京まで電車通勤していた。そのわが家のごく近くに一ヘクタールくらいの放置されて藪いっぱい里山があった。これがあるとき藪が伐採されて明るく森へ変身し市民に開放されることとなった。開放当初は春夏秋冬を問わず各種のキノコが数多く芽を出した。早朝の散歩が楽しくなった。朝早く通勤で駅へ向かって歩いていたら、鼻を一羽電柱の天端に発見した。体も両眼もすごく大きい、顔が三百六十度回転する、すごい威厳と圧迫感を伴ってまばたきをしないで私を睨んで来る。人間どもを睥睨しているという感じだった。どこから来て、いま

どこに棲んでいるのかはわからない。秋、栗の木には栗の実がたくさん実った。小枝のイガイガがはじけ割れてその中に陽光に輝く栗色の実を見たとき、その美しさと尊さに心を奪われてしばし茫然と見入ってしまった。それは当時の会社人間の自分に自然の美しさと秋の実りのすばらしさを教えてくれたような、自然から遠ざかっていた今までの忙しかった日々は何だったのと同じか知られたような、そんな気がした。長い間忘れていた遠い少年時代の里山を思い出したのかも知れない。新取りの下枝打ちに行ったり、山や川で遊んだこと、金色の稲田、いまはもう見ることも出来ない桑畑、桑の実を仲間と食べに行ったのは夢まぼろしのようである。

毎日一時間以上の電車通勤を余儀なくせざるを得ない東京勤務は、仕事ではそれなりに充実した日々をすごしていたが、定年後六年と見通せるようになって、人生を振り返るようになった。東京生活は本質的に性に合わないのではなにかと感じられてきた。狸やき

つね、野つさぎや青大将、梟などに日常遭遇してびっくりするような、そんな生活がしたいと思つた。そして、自然のすばらしさを毎日体感できる地へ移ろうかと考え始めた。最初は実家のある大分市とその隣の宮崎市を下見した。が妻の大反対にあつてあえなくダウン、次に子供たちが東京生活をする事から、東京から新幹線で二時間以内の地、上信越で探すこととし、今、妻の実家近くの新潟県長岡市へ移り住んで現在に至っている。

長岡市の長岡ニュータウンは国営越後丘陵公園に隣接している。里山の自然がたっぷりの、別の言い方をすれば特徴のない越後丘陵公園ではあるが、今は一年中季節の花々がきれいに咲く見事な公園へ変身している。里山も手を付けて管理をしつかりしていけば、もっといい里山の原風景を維持できるのではないかと考えている。長岡ニュータウンを選んだのは、里山がたっぷり有つて、越後丘陵公園は逃げて行かないし、この近隣住民となつて日々出入りし里山の散策が出来るであろう、もしかしたら公園の管理のお手伝いができるかもしれない、梟にも遭える、と考えて引越してきた？次第である。

は平成十年四月である。このときに里山ボランティア『里山づくりの会』が創立されてそのメンバーへ加えていた。当初の三年間は公園側が主体で運営されてきた。会であったが、その後いろいろ議論を経て会員の手による自主運営へ大きく切り替えられ、ひょんなことから会の代表に選ばれてしまった。ここから、里山ボランティアに深く関わらざるを得なくなつて行くのである。

最初はさぶの素人ながら周りに熱心な事務局スタッフがいて支えてくれたので、会員を取りまとめる象徴的存在でよかった。が、公園の野生・文化ゾーンの利活用検討委員会のメンバーに選ばれたことから、多くの学識経験者、里山ボランティアの実践団体等のリーダーの皆さんと知り合うようになった。それで大きな刺激を受け、否応無く勉強もし、実践のあり方等を教わることも多くなった。私も代表となつてから少しはお役に立とうと各種書物等を読んでいたが、実践の面でどうしたものかと考えていたところである。



この間に「さんぞうほうしの会」の尾瀬山林塾を紹介されて三日間の集中研修を体験できたことは望外の幸せである。鳥崎先生の人となりにも接することが出来、かつ、日本の森林の現状、山の守り人の育成と技術の伝承が大切だと先頭になつて後輩を指導して行かれる姿に感銘を受けている。いま再び森林塾にて鳥崎先生、保科先生という大先輩の指導を受けている。森林塾での実践体験は言葉にならない自信を私に与えてくれている。

越後丘陵公園の『里山づくりの会』の代表の座を早く若手に譲つて、ひとりの山の守り人として、はたまた二十一世紀のバイオマス発電システムを完成させるべく活動したいと思つた。里山のキーワードには森林、小川、棚田(不耕起栽培稲作・冬季湛水・水田は生命豊かな最大のバイオトープ)、そしてバイオマス発電を挙げておきたい。

# リレー通信



## 親子で山村留学 佐々木 裕子

ここにたどり着ききつかけは娘の山村留学だったかもしれません。都会で育ったひとり娘が親元を離れ、泰阜村の山小屋での共同生活をしながら地元小学校へ通つ、と言い出したのは我が家の大事件です。すべての始まりでした。「暮らしの学校」と呼ばれるここでは二十人弱の子供たちが生活に関わるすべてのものを昔ながらの手作り手作業して暮らしています。畑で野菜を、田んぼで米を、季節には山菜取り、魚釣りで食糧を調達していま



す。地元の自然の恩恵を受け、感謝しながら毎日の食事をおいしくいただいている事でしょう。

また、薪がとても大切な資源となりますので毎日の薪割りが重要な作業です。五右衛門風呂の薪、薪ストーブの薪はもちろん、極めつけは“登り窯”の薪です。暮らしに関わるすべてのもの作り、の中で陶芸はかなり本格的です。自作の食器のために一年に一度の登り窯に向けて作品を仕上げ、心をこめて焼くこの作業は、五日間昼夜通して薪をくべ続け、そのすべてを子供が交代で番をします。千百〜千二百度をキープするために薪を入れるタイミング、薪の本数に心を配り、熱さにも耐え、焼き上げる姿は感動ものでした。百時間以上にも及ぶ高温との戦いは連携なくしては成功しませぬ。一週間かけて冷まし、窯

だしする時のわくわくとした喜びに満ちた笑顔は（NHKで放送されました）何にも替えがたい尊い顔でした。人間が本来、心底感じる喜びは自然と共生し、多くの努力を積み重ね、そこから成果を得た時に自然と湧き出るものだと感じました。ものが豊かになり

便利になつてきますと人間は裕福になつた錯覚に陥つてしまつたのでしよう。生きるための知恵、自然と共存するすべをなくしては逆に本当の喜びを感じられず大きな損失なのに。先ほどの薪を例にとつてみますと娘たちは燃料として使つたあとの灰も残すことなく使い切るそろろん、やきものの釉薬、染色の媒染液、最後は畑の肥料です。山の薪炭林もここまで使えば本望でしょうね。一方で薪を切ることで森が再生し、生き物が生息し、自然の循環システムが完全に成り立っています。使い捨てのごみ問題について討議する必要もありません。スゴイ！の一言です。

子供たちのこの実践を見ていてかなりの感銘を受けたと共に、私自身この自然の壮大なシステムの一助になりたいと考え、迷わず森林塾に飛び込み、山への移住も実現しました。幸い、山深い天龍村に空家を持つていた事先祖の残した山を管理しなくてはならないこともありませんが田舎暮らしは不便で面倒な仕事が多くなりたいへん、と二の足を踏んでしまつていた私も今では、もの作り中心の自給自足をしながら、自然に生かされていると実

感できる生活をしております。折り悪く、つい先日、山の先生でもある父が亡くなりました。もっとたくさんの事を聞きたいと思つていた矢先の出来事に後悔が尽きませんが、これからは島崎先生、保科先生を師として、受け継いだ山を守つて行けたらと痛切に感じているところです。そして日本人が長年培つてきた、生きる知恵、感性を私たち世代で絶やすことなく子供たちに伝えて行きたいと切に願っています。



### コラム

草刈をしていると、たまーにへびに出会います。大概は機械の音や振動で逃げていると思うのですが、中には変わったものもいるようです。それがマムシだと私の場合「やった！」ということになります。マムシは頭の形が三角形ですし、体に円形の斑模様があり、体の中心に黒点があるが特徴です。すぐに仕事は後回しにして、捕まえます。帰って一升瓶に移し替え、一週間ほど水を入れ替えながら脱糞及び腹の中の物を吐き出させて

清める事一週間、頃合いを見て焼酎を入れると、マムシの焼酎漬けの出来上がり。特に打ち身には良く効くそうですが、その他、傷、虫刺され、風邪にも効く万能薬となります。「毒をもつて毒を制す」と言う事でしょうか。匂いが強烈に臭いのが難点ですが、保科先生によると、食べてもおいしいそうです。

とは言い、出会うことに喜んでばかりもいられません。へびが嫌いな人はもちろんですが、山にいるへびとしてはマムシは代表的な「毒へび」だからです。咬まれて死ぬ人が全国で年間十人程います。どんなときに咬まれるかというところ、じつといるのを気付かず草刈りをしていたり、座ろうとしたときに手をついたりした時。そして捕まえたのを酒のビンに入れてようとしていた時だそうです。つまり、顔の割には結構おとなしくて攻撃的ではないので、こちらが不用意に近づいて驚かさないうり咬まれる事はないと言つてます。もし見付けたらそつととしておきましょう。それでももし咬まれてしまった場合は、一、まず、どんなへびに咬まれたのか確認する。二、すぐに毒を吸い出す。口または吸引器があればそれで。

三、そして出来るだけ静かにかつ急いで病院に行き、血清注射など適切な処置を受ける。めつたに会うこともないので、それほど怖がる必要もないのですが、一応対処策は知つておいたほうが良いでしょう。今回、披露したのはたまたま二日前に捕まえたばかり。探して見つかるものでもないし、タイミングもあるので今回参加された方は見れてラッキーだったかも。

### おわりに

最近、スポーツドリンクの他にもアミノ酸飲料なるものが販売されていたりしますが、水文補給には腎臓や肝臓に負担のかからない「水」が一番なのかもしれません。機械に燃料、人間に水分。どちらも許容範囲をこえた酷使には耐えられないので、取扱には注意です。それとメンテナンスも忘れずに。

投稿大歓迎。ご意見、ご質問、ご要望、事務局まで。  
TEL 0265-70-7065  
FAX 0265-70-7994  
E-mail: ki-hayakawa@koanet.co.jp  
sh-sakano@koanet.co.jp  
携帯:090-4463-0062 (開催日)  
URL http://www.koanet.co.jp

